

猫と村正

小酒井不木

青空文庫

「母危篤きしくすぐ帰れ」という電報を受取った私は、身仕度もそこそこに、郷里名古屋に帰るべく、東京駅にかけつけて、午後八時四十分発姫路行第二十九号列車に乗りこんだ。この列車は昨今「魔の列車」と呼ばれて盗難その他の犯罪に関する事件が頻々として起り、人々の恐怖の焦点となつて居て、私も頗すこぶる気味が悪かつたけれど、母の突然の病気が何であるのかわからず、或は母が既に死んだのではなからうかとも思つて気が気でなく、この列車が私の利用し得る最初のもので、とりあえず、その三等席に陣取つた訳である。

「魔の列車」とはいえ乗客はすでに東京駅で一ぱいにつまつた。私の席のすぐ前の腰掛ベンチは、黒い色眼鏡をかけ、麦稈帽をかぶつて、洋服に夏マントを着た四十格好の人によつて占領されたが、その顔が非常に蒼ざめていて、いわば人相がよくなかつたので、私は時節柄ち一よつと寸、気味の悪い思いをした。然しかし、靴をぬいで腰掛の上に坐り、車窓にもたれて眼をとじると、いつの間にか、人相の悪い人のことなど忘れてしまつて、頭は母のことで一ぱいになつた。

いつもならば、私は列車の響に眠気を催すのであるが、今夜はなかなか眠られそうになかつた。後には、牛込の寓居ぐうきよに残して来た妻子のことや、半分なげやりにして来た会社

の仕事のことなどが思い出されて、とりとめのない考えにふけていたのである。

梅雨どきのこととて、こうつづ国府津を過ぎる頃は、雨がしきりに降り出して、しとしと窓を打ち、その音が、私の遺瀬やるせない思いを一層強めるのであった。列車内は煙草の煙が一ぱいで、旅客の中には眠っているものもあれば、まだ盛にはしゃいでいるものもあつたが、薄暗い電灯の光に照された陰影の多い人々の顔には、何となく旅の悲愁といったようなものが漂っていた。そうして私の気のせいか、人々の顔には「魔の列車」であることを意識して警戒するような表情が読まれた。ふと、私の前の、人相の悪い人に眼をやると、その人は軽いいびぎ躰をかいて眠っていた。

でも、そのうちに考え疲れたためか、私はいつの間にかうとうととしていた。列車が浜松を過ぎたころであつたと思う。車内がにわか騒々しくなつたのに眼をさまして、何事か起きたのかと注意すると、車掌やその他の鉄道従業員があわただしく往来していた。私は妙な予感に襲われて、私の前の座席を見ると色眼鏡をかけた人相の悪い人はどこかへ行ったと見えてその場にいなかった。で、私の背後にいた人に何事が起きたのかときくと、今二等車で、乗客が大金を盗まれたため大騒動をしているのだということであつた。私は「魔の列車」がその名にそむかなかつたことを知って全身がぞつとするように思った。

それから私は手洗に行こうと思い、何気なく立ち上って、靴をはこうとすると、私の右の靴が紛失していることに気付いた。私ははっとした。腰掛の下を探しても見えないので、宵の口から想像力の旺盛になっていた私には、私の靴の紛失が、何だか、二等車の盗難事件と関係のあるように思えた。魔の列車——二等車の盗難——人相の悪い男の不在——私の靴の紛失。こう考えて来ると、私はもうじつとしていられないような気がした。

「おい車掌さん、大変だ、僕の靴が片一方なくなつた！」

私は通りかかった車掌に向つて、大声でこう叫んだ。乗客は一斉に私の方をながめ中には立ち上る者さえあつた。

車掌は顔を曇らせながら、近づいて来て、先ず私の腰掛の下を捜したが、もとより有ろうはずがない。それから私の前のあいている腰掛の下を捜しにかかり、暫くの後、立ち上つたときには、その右手に一個の靴がつかまれていた。

「ちゃんとここにあるじゃありませんか。あんなに大袈裟に仰しやるものだから、びつくりしてしまつた」

と、車掌は私を責めるようにいつた。私は一寸恥かしい思いをしたが、ふと気がつくと、車掌のつかんでいるのは、私のとは少し格好がちがつて、しかも不思議なことには左の靴

であった。

「車掌さん、それは僕のではないよ、第一僕になくなった靴は右なのに、それは左の靴じゃないか」

「こういわれて、こんどは車掌が変な表情をして、自分の持っている靴と、私の右の靴とを比較くらべて見た。」

「はてな、これはおかしい、ことによると……」

この時、留守にして居た色眼鏡の人が手巾ハンケチで手を拭き拭き帰って来て、車掌の姿を見るなり怪訝けげんな顔をして立ちどまった。車掌は早くもその人の足に眼を注ぎ、

「おや、あなたは、両足とも右の靴をはいているじゃありませんか」といった。

その人はうつむいてしばらくの間足許をながめていたが、はじめて気のついたような表情をしていった。

「や、これはどうも、ついその……」

「この靴があなたのでしょうか？」と車掌は手にしていた靴をその人の前に差出した。

「いかにもそれが私のです」と、その人は顔を紅くして答えた。

車掌の顔には疑惑の色が浮んだ。こいつ怪しい人間だと思ったのであろう。急に真面目

な態度になっていった。

「でも、おかしいじやありませんか、他人ひとの靴をはいて、それに気がつかぬとは？」

「いや、全く申し訳がありません。何しろ……」

「申し訳がないではすみませんよ、こういう間違いは、偶然な間違いとは考えられませぬから」

「でも間違いにちがいないのだから勘弁して下さいよ。わたしは今手洗ちようずに行つて来ただけです」

「そりゃね、いつもなら、笑つてすまされまますけれど、何しろ、今二等車にある事件が起きたのですから、御面倒でも一寸車掌室に来て下さい」

その人は急に顔を蒼くした。

「それじゃ、納得の行くようにここで申し上げよう。実はわたしは、片眼が不自由なんです」

こういつて、その人が色眼鏡を取ると、右の眼のつぶれた跡が悲惨な姿をしていたので、私は非常に気の毒な思いがした。

然し車掌はなおも得心しなかつた。

「けれど、他人の靴か自分の靴かは足の感じではわかりませんか」

「それがその私の左足は義足なんです」

こういつて、その人は、洋袴ズボンをまくつて見せようとしたので、車掌は始めて顔を和げ、

「もう、それには及びませんよ。いやどうも失礼しました」

こういつて車掌は靴を置いて、逃げるようにして去った。しかしその人は別に怒った顔もせず、再び私の前に腰掛けていった。

「あなたのを間違えたのでしょうか、大変失礼しました。何しろ不具かたわものですから、どうか御ゆるしを……」

「どう致しまして」と、私はあわてて制していった。「さぞ御不自由で御座いましょう。とんだ御心配かけまして却かえつて恐縮です」

それから私が手洗をすまして帰つて来ると、その人は棚の上の信玄袋から、梨と小刀ナイフを取り出し私にもすすめた。私はその好意を謝し、内心では、それまでその人の人相のよくないことに疑惑を抱いたことを恥じて、遠慮なく、御馳走になった。母や妻子のことで一ぱいになっていた頭に、この時はじめて余裕を生じ、それと同時に、私はその人に対して一種の興味を感じはじめた。というのは、私は、いわば直感的にその人が何か深い因縁で、

不具者になったように思えたからである。

「どちらまで、御越しで御座いますか」とその人は私に向ってたずねた。

「母が危篤だという電報を受取ったので、名古屋まで帰るところです」

「そうですか。それは御心配で御座いますな。いやもう、そういう時の御心持には十分同情が出来ますよ。私はいま家内の遺骨を携えて家内の郷里の大津まで行くところです」

私はそれをきいて何となくぎくりとした。そうして思わずもその人の顔を見つめた。

「御母さんの御病気のときに、こんな縁起のわるい御話をしては大へん失礼でしたな」

「いいえ、私は縁起とか何とかを決して信じません」と私は笑いながら答えた。

するとその人は急に真面目な顔つきをして言った。

「私も以前は、縁起だとか、物の祟りだとかを信じなかつたのですが、こうして家内に死なれたり生れもつかぬ不具者かたわものになつたりしますと、やはり、そういうことを信じないではいられなくなりましたよ」

私はこの言葉をきくと妙な感じに襲われた。というのは、平素私は迷信を一切排斥していたのであるが、今日母の危篤の電報を受取つてからというものは、何となく迷信をしりぞ斥けることが出来ぬようになって、実をいうと先刻、この人から、妻の遺骨云々のことをきい

たとき、何だか母が死んでしまいそうな気がしてならなかったからである。

「奥さんは最近におなくなりになりましたか」と、私はしんみりした気持になってたずねた。

「ちようど五十日前ぜんになくなりました」といってその人は悲しい表情をした。私はこんなことをきかねばよかつたと思ひ、話題をかえるつもりで、

「失礼ですがあなたは戦争にでも御出になつて負傷なされたので御座いますか」と、たずねた。

するとその人は更に一層悲しそうな表情をしていった。

「妻のなくなつた同じ日に眼と足に負傷したのですよ。ですから、まだ義足をはき馴れどもおらず先刻はとんだ失敗をしたのです」

私はその時、その人の悲しみに同情するよりも、私の予想が当つたような気がして、その人の不具となつた事情がききたくてならなかつた。しかしまさか、その話をきかしてくれともいえぬのでそのまま口を噤つぶんで、窓の方に眼をやつた。

雨はまだ頻に降つていて、窓を打つ水滴が砕けては流れた。汽車は私たちの気持を少しも知らぬ氣に相変らず单调な音をたてて走つた。私が再びその人の方を向くと、ちようど

その時二人の視線が打つ^ぶかった。すると、その人は、私の心の中を察したと見え、にこりとしながら、

「まだ夜あけまでに間があるようですから、一つ私の身の上話を御耳に入れまじょうか」といい出した。私は心の中で大に喜^{おおい}んで、同意を表すると、その人は次のような恐しい物語りをはじめた。

私は日本橋に株式仲買店を持つ辻というもので御座います。御承知のとおり、株屋などというものは非常に迷信深いのですが、私は先刻も申しましたとおり、決して迷信などを意にかけませんでした。ところが最近私の身にふりかかって来た不幸と災難のために、すっかり私は迷信家になってしまいました。そうして、今では、物の祟りだとか縁起だとかを信じない人は、その人が平凡に暮して来て何の不幸にも逢わない証拠を示しているようなものだと思^{おぼ}えるようになりました。

私がここに持つているのは、実は私の後妻の骨で御座います。先妻は一年半ばかり前になくなりましたが、それ以後私の家には不幸が続ぎ、とうとう後妻にも死なれ、私までがこうした不具になったので御座います。そうして、これらの不幸や災難はみんな先妻の亡

霊の祟りだったのです。いや、こういうと、あなたは私の迷信を御笑いになるかも知れませんが、だんだん御話をすれば御わかり下さるだろうと思います。実は先妻は自然な死に方をしたのでなく、自殺して相果てたので御座います。

昔から女の執念は恐いものだと思いましたが、こうも極端なものだということは過去四十二年間夢にも思わなかったので御座います。彼女の自殺の原因はやはり嫉妬に外なりませんでした。私が他に女を拵えたのを憤って日本刀で頸をかき切って死んだのです。私は彼女の家に養子に迎えられたものですが結婚後二年ほど過ぎると両親が相前後して死に、私たち二人きりの身うちとなりました。私たちの間に子供がありませんでしたが、それが彼女のヒステリーを一層重くならしめた原因だろうと思えます。元来彼女は、一口にいえば醜婦といった方がよく、はじめ私は彼女との縁組に不服でしたが種々の深い事情があってとうとう結婚したので御座います。それが抑もの間違いのもとでした。即ち私が断然として養子に行きさせねばよかったです。つまり私の意志が薄弱であったことが、今こうした悲運を齎したといつて差^{もた}問^りありません。仲人は私に向つて先方が容貌^{きりよう}が悪くても、ほかに美しい女を囲えばよいではないかといつて私に頻にすすめました。そうして私は皮肉にも、仲人の言葉を実行してほかに女を囲うようになったのですが、そのため

に先妻は私とその女をうらんで自殺したので御座います。

容貌のみにくい女は残忍性を持つということを決かの書物で読んだことがあります、私は私の経験によつて、その残忍性が死後には一層強くなつてあらわれるということを発見しました。私の困つたのは芸者上りの女でしたが、一たびそのことが先妻の耳にはいりますと、私の家は実に暗澹あんたんたる空氣に満たされました。彼女は泣いて私に訴えるばかりでなく、時には嘔みついて私を責めるのであります。その都度店のものが仲裁にはいつてくれましたが、そうしたことが度重なつた末ある夜、私が女の許へ行つて居た留守中に、家に代々伝わる村正の刀で頸部をかき切つて自殺を遂げたので御座います。

この村正の刀というのは、申すまでもなく、その家に不幸を齎すという言い伝えがあります。一旦鞘を出ると血を見ずにはおさまらぬというようなことも申します。何でも四代前の主人が発狂して同じ刀でその妻を斬つたということでしたが、先妻も、やはり発狂して、同じ刀で自分を切つたので御座います。いや、うっかりすると、私も共に斬られていたのかも知れません。佐野治郎左衛門の芝居を見ますと、「籠釣瓶かごつるべはよく切れるなあ」という科白せりふがありますがああ刀もたしか村正だつたと思います。私の家に伝わる村正も、その籠釣瓶のように実によく切れるので御座います。先妻はその村正を右手に持つて、頸

部を横に切ったのですが、創きずは脊椎骨に達するくらいで、検屍の人もびっくりしました。たつた一刀で、しかも女の力であるような創の出来るといのは、刀がよく切れたからだと推定されました。後に私自身もその村正の切れ味を経験して、いかにもよく切れることをたしかめた訳ですが、私は従来、どんなによく切れる刀でも、これを使用する人の腕が達者でなくては、そんなに見ごとに物を切ることが出来るものでないと思っていました。ところが、後にその考えの根本的に誤っていたことがわかったのであります。

さて、先妻はその時に恐しい遺言状を残して行ったので御座います。その文句によると、幽霊になって私の女を取り殺し、並びに私を不具にするか、或は取り殺さねば置かぬというのであります。果して私たちは、そのとおりの運命に出逢ったので御座います。

尤ももつと、その時は、嫉妬に駆られた女の常套語として、私は少しもそれを気に懸けませんでした。そうして、先妻の死後半ケ年というものは私にも女にも何事も起りませんでした。私は身のまわりの不自由を感じて、とうとう、その女を家に引き入れて後妻としたのですが、それがいわば不幸を招く発端となつたので御座います。

私の家には、祖母の代から飼いはじめたという三毛みけの雌猫めねこがおりました。可なりに大きな身体をしていましたが、この三毛を先妻はわが子のように可愛がりました。その可愛が

り方は実に常軌を逸していたといつてもよい程でした。先妻が自殺してその死骸が発見されたとき、三毛が死体の上に乗つて蹲うずくまつていたので、店のものがびくりして追おうとしても、暫くの間はどうしても動かなかつたということでした。この三毛が、後妻に少しも馴染まなかつたので御座います。後妻が抱き上げようとしますと、必ず引掻いて逃げて行きました。私は先妻の生きている時分からあまり三毛を好みませんでした。先妻が死んでから三毛は私に対しても、何かこう一種の敵意を持つておるかのような風をしました。そうして三毛は時折じつと立ちどまつては、私たちを凝視するのですが、その凝視に逢うと、私も後妻も肌粟を生じないではいられません。とうとう後妻はあの猫には先妻の死霊がついておるから、どこかへ捨てさせてくれと私に頼みましたので、はじめに私は店のものに牛込の方まで持つて行かせて捨てさせたのですが、二日すぎるとちやんと歸つて来ておりました。いよいよ私たちは気味を悪がつて、それから随分遠いところまで度々捨てさせたのですが、三四日過ぎると必ず歸つて来るのでありました。後妻はいつそ毒殺してしまおうかなども申しましたが、何だか、後の祟りがおそろしいように思われたのでその儘毒殺まよを決行せず過ぎました。

とかくするうちに、先妻の死後一年あまりを経ました。すると後妻は右の眼がかすんで

よく物が見えなくなつたといひ出しました。私は早速眼科医に見て貰うようにすすめましたが、後妻は大の△△教信者でして、御祈りして貰えばなおるといって、医者へは行かず近所にあつた△△教支部に通うたのでした。然し眼はだんだん見えなくなるばかりでしたから、私はしきりに医師をたずねるように主張しましたが、後妻も中々頑固なところがあつて、かえつて意地になつて反対しました。

ある日、後妻が△△教支部から歸つて、私に向つて申しますには、神様にうかがつて貰つたところ、自分の眼病は先妻の崇りで三毛に先妻の死霊がのりうつつてゐるから、三毛のいる間は眼病は治らぬ、それゆえ、これからは三毛のいなくなる御祈りをしてやるとのことだつたと告げるのであります。私はそんなことが果して出来るかどうかを内心大におおい疑つておりました。

ところが、不思議にも、それから間もなく三毛がいなくなつたのであります。十日経ち二十日経つても歸つて来ませんでした。後妻はこれを知つて大に喜び、いよいよ神様の不思議な力を信じ、自分の眼病も遠からずなおることと樂觀しておりました。

ところが眼病はよくなるばかりか、いよいよ右の眼は見えなくなつてしまいました。それでも後妻は△△教の力にたよつて医師を訪ねようとはしませんでした。

ある夜私は可なり遅く帰宅しました。いつも後妻は私より先に寝たことはありませんでしたがその夜は少し気分が悪いといって床の中にはいっておりました。そうして、いつも電灯をつけて寝るのでしたが、その夜は眼がちらつくといつて電灯を消しておりました。私は何気なく、その寝室をあけますと、妻は私の声をきいて起き上がりましたが、その時私は暗やみの中に猫の眼のようにぴかりと光るもののあるのを認めました。

「三毛がいる！」と、私は思わず叫びました。

「ひえーッ？」といつて後妻はとび上つて電灯をつけました。

ところが、その室には三毛の姿が見えませんでした。私たちは思わず顔を見合せましたが、お互いの顔には恐怖と安心との混合した表情が漲みなぎりました。

「まあ、驚いた！」と後妻は申しました。

「いや、俺の見違いだったんだ！ 堪忍してくれ」

こういつて私は、寝間着に着換え、彼女を寝かせて電灯を消し、いざ寝ようとするとき妻の枕もとのあたりに前と同じようなぴかりと光るものを見ました。私はがぼとはね起きて、電灯をつけましたが、やっぱり猫はおりません。

「まあ、どうしたというの？」と、彼女はびっくりしていいました。

「なに、何でもないんだ」と答えた私の声はたしかに顫えておりました。

それから私は電灯を消して再び寝につきました。が、やがて私が彼女の方を向くと、再びびっくりとするものが見えました。私ははげしい興奮を辛うじて抑制しながら、徐ろおもむに右手をのぼして、その光るものの方へ近づけると、私は思わずも彼女の鼻をつかみました。

「何をなさるの？」と、後妻は笑いながらいいました。私は笑うどころでなく、なおもその光る物の方へ指をのぼして行きますと、彼女の右の眼の睫毛まつげにさわりました。私はぎよつとして手を引きました。

猫の眼のように光るのは、まがいもなく彼女の右の眼でした。

私はその時心臓が胸の中から、抜け出るかと思うような感じをしました。

後妻が猫になった！

猫の崇り！

先妻の執念！

こう考えると私は、もう恐しさに彼女にそのことを告げる元気がありませんでした。その夜は一晚考えて寝られませんでした。が、あくる日になって、私は断然、彼女には告げないで置こうと決心しました。彼女がもしそれを知ったならば、発狂し兼ねはしないだろ

うと思つたからです。或は私の錯覚であつたかも知れぬと思ひ、その後、くらやみの中でそれとなく彼女を観察しましたところ、まがいもなく彼女の眼は猫のように光りました。

私はその時はじめて、物の祟りということを信ずるに至りました。今になって見れば彼女の眼の光つたのは何も不思議なことではありませんが、しかし、物の祟りを信ずるの念は、もはや動かすことが出来なくなりました。

後妻は何も知らずに△△教に通いました。然し右眼は遂に完全に明^{めい}を失つてしまいました。とかくするうちに、彼女の眼は暗やみの中で光らなくなりましたので私は一時内心で喜びましたが、明を恢復することが出来ぬばかりか、だんだん右の眼が前方に突出して来るようになり、それと同時に彼女ははげしい頭痛を訴えました。

ある日彼女は突然高熱を発してどつと床につきました。私はもう我慢が出来なくなつて医師をよぶことにすると、さすがの彼女も同意を表しました。診察に来て下さったN博士は、彼女を診察し終るなり、私を別室に呼んで、

「はじめ奥さんの右の眼は、猫のように暗やみの中で光りはしませぬでしたか？」

と、小声でたずねました。私はびっくりして答えました。

「そうです」

「あれはグリオームという病気で、網膜に出来る悪性の腫瘍なのです。子供に多いのですが、大人にもたまにあります、猫の眼のように光る時分に剔てきしゅつ出するとよいのですが、今はもう手遅れです」

「手遅れと申しますと、右の眼が助からぬということですか」と私は心配してたずねました。

「いいえ、残念ながら腫瘍が脳を冒しまして、急性脳膜炎を併発しましたから、とても恢復は望めません」

私は脳天に五寸釘を打こまれたように思いました。地だんだ踏んで後悔してももはや及びませんでした。

その夜から妻は高熱のために譫語うわごとをいうようになりました。

「三毛が来た！」

「三毛が来た！」

こう叫び続けて、三日目の午後、彼女は二十七歳を一期ごとして瞑目しました。

たとい、彼女の右眼の病気が不思議な原因でないとわかってても、私は、彼女が先妻の死霊の祟りのために死んだのだとかたく信じました。そうして、私は心の中で、先妻の死霊

と、その乗りうつつている三毛とを呪いました。若し三毛がその時家の中にいたならば、きつとたたき殺したにちがいないと思うほど憎悪の情に駆られました。

私は彼女の死体を八畳の室に運ばせました。この室は縁側がついていて前に可なりに広い庭を控え、彼女が生前一ばんすきな室であつたからです。私は障子を取り払って彼女を庭の方へ向わせ、香を焚たきました。香の煙が流れて、庭の新緑の木の葉のまわりにただよつた有様は、今でも忘れることの出来ぬ悲痛な印象を与えました。

それから私は親戚のものたちと葬式その他の準備の相談をすべく別室に集りました。すると程なく店のものがあわてて私のところへ飛んで来ました。

「旦那大へんです、三毛が庭へ姿を見せましたよ」

これをきくと同時に、私の憤怒の血は一時に逆上しました。私は三毛に復讐するのはこの時だと思い、奥の間へ行つて、村正の刀を取り出しました。そうして死人の室の襖ふすまをあけますと、驚いたことに三毛は死体の上に、どっしりと蹲すままっております。

私はさつと刀を抜きました。三毛は私の殺気を認めたのか、ぱつと飛び出して、庭の上に走り降りました。私も続いて庭に降りました。その時、三毛は庭の杉の木にすらすらとのぼりかけましたので、私は追かけざまやつと行って、三毛に斬りつけました。

果して手ごたえがありました。

はっと思う間に、私は左の足と右の眼に燃えるような痛さを覚えました。

三毛を斬つたと思いの外、三毛は逃げてしまつて、直径五寸すんもあろうと思う杉の幹を、斜に真二つに切り放つておりました。そうしてその上の方の幹が手前へすべつて下に落ちたとき、その尖端が私の左の足を芋刺しにしておりました。それと同時に、一本の枯枝の端が私の右の眼をずぶりとつき刺しておりました」

ここまで語つて、色眼鏡の人はほつと一息ついた。汽車は相変らず同じような響を立てていたが私は何だか恐しい世界に引き摺り込まれて行くような思いがした。

「いや、とんだ長話をしましたな」とその人は続けた。「私はそれからすぐ病院にかつぎ込まれ、右の眼はつぶれただけですみましたが、左の足が化膿してついに膝から下を切断するのやむなきに至りました。後妻の葬式は親戚や知人の手で営まれ、私は四十日間の入院の後、義足をつけて歩くことが出来るようになりました。三毛はその後姿を現さず、永久に行方不明になりましたが、私の不具になつたのも、やはり先妻の祟りだと信じて疑わないのであります」

話が終った時、雨はやんで夜は白々と明けかけていた。名古屋でその人に別れて、家に駈けつけると、母は脳溢血で重態に陥っていたが、四日の後、とうとう一度も意識を恢復しないで死亡した。私は汽車の中のあの恐い話が、何となく、母の死の前兆であつたよ
うな気がしてならないのである。

青空文庫情報

底本：「怪奇探偵小説名作選1 小酒井不木集 恋愛曲線」ちくま文庫、筑摩書房

2002（平成14）年2月6日第1刷発行

初出：「週刊朝日特別号」

1926（大正15）年7月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：宮城高志

2010年4月22日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猫と村正

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>